

少数民族観光に関わる人権問題と観光倫理
ータイ・ラオス・ベトナムの事例からー

宮 本 佳 範

愛知東邦大学

少数民族観光に関わる人権問題と観光倫理 ータイ・ラオス・ベトナムの事例からー

宮 本 佳 範

目 次

1. はじめに
2. 先行研究と本研究の課題
 - (1) 本研究の対象地域に関する先行研究について
 - (2) 本研究の課題
3. 少数民族観光の特徴と人権問題
4. 「見せる」ことに関わる人権問題
 - (1) 観光対象に“利用される” 難民
 - (2) 少数民族を集めて作られた“少数民族村”
 - (3) 観光対象となる子どもたち
5. 「見られる」ことに関わる人権問題
 - (1) 日常生活を「見られる」こと
 - (2) “貧しさ”を観光すること
 - (3) 奇異なものを見る観光客のまなざし
6. 考察

1. はじめに

中国南部からインドシナ半島中央部に広がる山岳地帯には数多くの少数民族が暮らしている。彼らの中には、独自の言語を持ち、民族衣装を身にまとい、古くからの風習を守った伝統的な生活文化を維持している民族も多い。そんな彼らの生活文化は先進国の人々にとっては珍しいものであり、彼らの生活文化を対象とした観光（いわゆるエスニック・ツーリズム）が広く行われている。農業中心の自給自足に近い生活を続けてきた少数民族の人々が現金収入を得る手段は多くない。主な換金作物であったケシの栽培が強く規制されるようになったこともあり、観光は重要な収入源として期待されている。また、現金収入を得る以外でも、彼らの伝統文化を対象とした観光が盛んになることは、住民自らが伝統文化に誇りを持つこと、さらには伝統文化の保存にもつながるといわれている。しかし、現実には必ずしもプラスの効果のみを享受できるとは限らず、様々な問題が生じている。特に、伝統文化の破壊、形骸化、商品化といった問題についてはこれまでも数多く指摘されてきた。また、観光収入の分配の問題、観光者とのトラブルなども起きている。

日本の農山村でも近年、地域活性化に向けて、地域の伝統的生活文化を生かした観光振興への取り組みが各地で行われている。その場合も、期待されたほど地域活性化につながらない、渋滞やごみ問題等が発生するといったマイナスの影響が発生する場合もある。しかし、東南アジア地域の少数民族を対象とした観光の場合、日本の農山村における地域活性化に向けた観光振興の現場では考えられない種類の問題が生じている。その一つが観光に関わる人権問題なのである。

少数民族の人々は、その国で多数を占める民族との政治的・歴史的問題、そこから派生する難民・移民問題、さらには貧困の問題、教育問題など、多くの問題を抱えている。そして、一見観光とは直接関係なさそうなそれらの問題が、観光の現場にも大きな影を落としているのである。複雑な状況で様々な力学が働く中、弱い立場にある少数民族の人々は人権に関わる問題にさらされつつ「観光対象」となっている。観光が、真に彼らの生活、文化、社会的地位の向上に貢献するものとなるためには、それらの問題に正面から取り組んでいかなければならない。そのために、本研究では、実際に観光との関わりでどのような人権問題が生じているのか、何が問題なのか、少数民族観光が盛んなタイやラオス、ベトナムの事例を基にして考えていきたい。

2. 先行研究と本研究の課題

(1) 本研究の対象地域に関する先行研究について

タイは古くから少数民族観光が盛んな地域である。そこで、はじめにタイにおける少数民族観光に関する研究がこれまでどのような視点からなされてきたか、その概要を確認しておく。まず、Cohen (2001) は、山岳少数民族観光の問題を観光産業と国家の関わり、文化への影響まで幅広く論じている。また、石井 (2004、2005) は観光対象となる「山地民」のイメージやそのオーセンティシティに対する国家の関わりなどを論じている。そして片山 (2006) は、タイにおける複数の少数民族観光の事例を取り上げ、観光の拡大によって、観光客に見せるために抽出され、切り取られ、演出を加えられた伝統文化が提示されるようになる現状を示している。こういった観光地で呈示される民族文化のオーセンティシティの問題は、タイに限らず少数民族観光を対象とした社会学、人類学的研究の主要なテーマとなってきた。さらに、近年では問題解決志向の研究も行われている。一例をあげると、Theerapappisit (2009) は、メコン流域で行われている少数民族観光対象としたプロ・プアー・ツーリズム（貧困克服のための観光）について論じている。また、須永 (2009) は、タイ北部の山地民カレンの人々が行っているCBT (Community Based Tourism) の事例を取り上げ、経済的効果とは異なる発想で観光開発を行っていく必要性を指摘している。

また、本稿でも取り上げるカヤン族（首長族）観光もタイ北部を代表する観光であり、カヤン族に焦点を当てた研究も行われている。例えば、須藤 (2007) はカヤン族の村でのフィールドワークから、産業化された観光場面では観光者と観光地の人々との互酬性がなくなり、観光地の人々が一方的に「見られる」対象として客体化、商品化されてしまっていることの問題点などを明らかにしている。また、田中・佐藤 (2008) は観光対象となっているカヤン族の生活様式や村

落構造、教育、文化などに関して詳細に記述し、観光空間と生活空間が分離しつつある傾向を指摘している。

ラオスやベトナムにおける少数民族観光に関する研究においても、観光による文化の保存やアイデンティティ、観光開発のあり方などについて論じられている（例えば、ラオスについては中田（2003）、ベトナムについては池本（2009）など）。もちろん、タイ、ラオス、ベトナムを対象としたものに限定しなければ、数多くの少数民族観光に関する研究が行われている。特に、スペイン・バスク地方の文化の商品化の問題をいち早く指摘したGreenwood（1977）の研究や、インドネシア・バリの文化観光の研究を通じて観光が単に伝統文化を破壊するものではなく新しい文化を創り出していく側面を明らかにした山下（1999）の研究などは、タイやラオスの少数民族観光にも応用できるものである。

（2）本研究の課題

しかし、石井（2010）は、これまでの少数民族観光研究が特定の領域に偏っていることを指摘する。具体的には、①民族文化の再評価とエスニック・アイデンティティのリバイバル、②少数民族内部の立場の分化、という二つの領域に集約されるという。そして石井は、これまでほとんど研究されてこなかった分野として、「少数民族の法的地位—国籍問題—」を取り上げている。この二つの領域に既存研究が集約できるかは議論の余地が残るが、少数民族の国籍問題¹⁾が観光との関連で論じられることが極めて少なかったことは確かである。国籍は教育や医療等、その国の人間として生活していくうえで不可欠なものであり、それが与えられていないことは人権に関わる大きな問題であるといえよう。

少数民族の人々は、「観光対象」である以前に、その国の国民であり、基本的人権を持つ者である。しかし、少数民族観光に関する研究の多くで、彼らは観光対象となる伝統的生活文化を持つ者としての位置付けからのみ論じられている。したがって、観光が彼らに及ぼす問題は、彼らが持つ伝統文化への影響や経済的影響の問題として取り上げられるのである。もっとも、これまでの研究がまったく人権に関する問題を無視してきたというのではない。少なくとも、観光との関わりは別として、少数民族の人権問題、特に教育に関わる問題点などは数多くの研究がなされている。また、観光分野においても、池本（2010）は少数民族の社会的地位の問題を、観光客の少数民族を「野蛮人」として見るまなざしの問題とからめた非常に示唆的な研究を行っている。また、人権や観光倫理を主題とした研究でなくとも、論文中で例えばカヤン族（詳しくは後述）の観光を「人間動物園」と批判する記事を引用するとき、そこには人権に関わる問題としての認識があるだろう。しかし、観光との関わりから生じる人権問題がいたる所で見られる現状を考えれば、それは観光分野からより積極的に研究すべき重要な課題であると考ええる。そこで本稿では少数民族観光の現場で起きている人権に関わる問題を整理し、そのうえで倫理的な少数民族観光としていくための要件を考察していく。

3. 少数民族観光の特徴と人権問題

観光に関わる人々をホスト、ゲスト、ブローカーに分類することがあるが、この分類でいえば、観光対象となる少数民族はホスト側に分類されるだろう。しかし、例えばエジプトのピラミッドという観光対象があり、それを見に来るゲストを“おもてなし”するホストとしての現地の人々（ガイドやホテル、おみやげ販売など）と、自らの存在が観光対象そのものになるという立場にある少数民族の人々とは、同じホスト側といっても性質が異なる²⁾。

少数民族観光は、観光客という「人」が少数民族という「人」を観光する、観光ブローカーという「人」が少数民族という「人」を売り物とした観光を営む、という特徴がある。観光開発する際に観光対象に対する何らかの配慮が必要であることは、文化財や自然を対象とした観光の場合でも同じであろう。しかし、「人」そのものが観光対象となる少数民族観光の場合、その配慮が十分でなければ、人権問題という大きな問題につながる可能性がある。これは、文化財や自然を対象とした観光の場合には見られない特徴である。

少数民族観光に関わるそれぞれの立場の「人」と「人」との関係が対等であれば、人権問題やそれに関連する倫理問題は生じにくいかもしれない。しかし、少数民族観光に関わるこれらの「人」と「人」との関係が対等ではないのが実情である。少数民族の人々は、経済的にも社会的にも彼らの属する国の多数派の民族に比べて劣位に立たされている場合が多い。また、貧しさや政治的理由により隣国から移り住んだ人々（難民認定がある者、不法の者、正規の手続きをしていない者を含む）のなかには、生きていくために行政当局や観光ブローカーの手を借りざるを得ない場合もある。その場合、行政当局や観光ブローカーの間にはおのずと力の差が生じることとなる。また、多くの場合観光客と彼らとの間にも大きな貧富の差がある。近代的な文化を持つ者と前近代的な文化を持つ者といった違いもあるだろう。このように、少数民族観光はそこに関わる「人」と「人」との関係が対等とはいえない状況において成立しているのである。それが人権問題を生じさせる要因のひとつといえよう。

そして、本研究においては、観光に関わる「人」と「人」との関係を意識しながら、実際に少数民族観光が行われている状況について各種資料を調べるとともにフィールドワークを行った。その結果、観光に関わる人権問題は、その性質から少なくとも、①「見せる」ことに関わる人権問題、②「見られる」ことに関わる人権問題、の2種類があることがわかった。①は、観光対象としてその民族の生活文化を観光客に呈示しようとする（観光開発の過程を含む）から生じる人権に関わる問題、②は実際の観光場面において観光客のまなざしを受けることから生じる人権に関わる問題、である。そこで、次にこの二つの視点から少数民族観光の現場における典型的な事例を整理してみたい。

4. 「見せる」ことに関わる人権問題

(1) 観光対象に“利用される”難民

最初に、タイ北部における少数民族観光の象徴的な事例である、カヤン族の事例を見ておきた

い。カヤン族の女性は小さいころから首にコイルを巻き、首を長く伸ばす（長く見せる）風習があることから、「首長族」として知られている。タイ国内に住むカヤン族は、主にタイ北部のミャンマーとの国境近くにあるメーホンソーン近郊に住んでいる。

カヤン族は、1980年代頃からミャンマーより移住してきた難民である（城前 2010）。難民は本来なら難民キャンプから出ることは許されない。しかし、彼らは難民キャンプ以外の複数の村にも住んでいる。彼らがそこで暮らすようになった背景には、彼らの姿が観光客を惹きつけるものであることに目を付けた観光ブローカー、さらには観光振興に力を入れる行政当局も関係しているという。したがって、難民キャンプ以外のカヤン族の村は観光客を受け入れており、タイ北部の観光を宣伝する様々な媒体に首にコイルを巻いたカヤン族の女性の写真が使われている。観光ブローカーは、現在でも積極的にミャンマーからの移住をすすめているという。

筆者が訪れた村は難民キャンプの隣に造られたナイソイ村である。ナイソイ村はメーホンソーンから車で1時間程度であるが、未舗装で荒れた道が続き、川を車で渡る部分もあり、大きな観光バスで行ける場所ではない。そういう意味で、未開を求める観光者には面白みのある場所だろう。しかし、村自体は観光化した村である。入口で250バーツを支払う。そして、村の中に歩いて行くと、道の両脇でお土産物を売るカヤン族の女性が微笑んでいる。中には機織りをしている女性もいる。観光客はこういった女性にカメラを向け、また、一緒に写真を撮ったりする。写真を嫌がることもなく、観光客の要望に応じる。写真を撮ったことでお金を要求されることもない。自分たちが「観光対象」であることをしっかりと認識しているようだ。村は小さく、30分もあればゆっくり回れてしまう。村の奥には学校があり、子どもたちが勉強していた。その日にいた子



写真1 お土産を売るカヤン族の女性
（ナイソイ村にて：2012年筆者撮影）

どもたちのなかに首にコイルを巻いた者はいなかった（カヤン族以外の村から来ている子どもも多い）。タイ人や他の民族の教師とともにカヤン族の女性教師もいたが、やはりコイルは巻いていない（かつては巻いていたという）。村の中心部には住居も多く、日常生活を送る人々の姿も見かけるが、コイルを巻いていない女性も多い。

須藤（2007）によれば、首にコイルを巻いている女性には1月に1500バーツ支給されているという。須藤は、そのため

実際にはほとんどの女性がリングをつけているというが、2012年のナイソイ村ではリングを着けていない者も多かった。また、村によっては、首輪を装着したカヤン族の女性は8時から17時までの間は民族衣装を着用すること、といった「営業時間」のようなものが決められているという（田中・佐藤 2008）。このように、彼女たちは常に首にコイルを巻くことを強いられているわけ

ではない。したがって、彼女たちが観光対象となることを強制されているとはいえない側面もある。

しかし、難民という立場であり、自由な選択のもとで観光対象になるという選択をしたとは言えないことは確かである。さらに、BBCの2008年の記事によれば、タイ政府はフィンランドやニュージーランドから彼らを引き受けるという申し出があったにもかかわらず、それを拒絶しているという。それは彼らがその地域の観光産業の中心的な役割にあるからだろうと疑われることを、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の見解とともに報じている。タイ政府は、彼らを観光に利用するために難民キャンプの外に居住させておきながら、難民キャンプ外に居住しているということで彼らは難民ではないという主張をしているという。観光を維持するために軟禁しているとさえいえる状態であり、「人間動物園（human zoo）」として非難されているのである。これは、彼らが観光対象であるがゆえに生じた人権問題の典型的な例といえよう。

（2）少数民族を集めて作られた“少数民族村”

さらに広く知られた問題のある例を見ていきたい。それは、観光客に見学させるために少数民族を集めて作られた“少数民族村”である。こういった少数民族村はチェンマイやチェンライ周辺に複数作られている。

チェンマイはかつてラーンナー・タイ王国の首都として栄えた古都で、現在も数多くの寺院が残り、多くの観光客が訪れるタイ北部最大の都市である。そして、北部に広がる山岳地帯に住む少数民族の村へのトレッキングの拠点として知られている。チェンライはゴールデントライアングル³⁾に近いこともあり、周辺には数多くの少数民族の村が点在している。チェンマイやチェンライの旅行会社はそれぞれエレファントライドなどとセットで村を訪問するトレッキングツアーを行っている。その多くは1泊2日以上で、少数民族の村に一泊するものである。しかし、日程的な問題や、トレッキングに興味はないが少数民族を見てみたいという観光客も多いことから、日帰りで訪れることができるような“少数民族村”が作られるようになったのである。そこには複数の少数民族が、観光客に「見せる」ため居住させられているのである（一部を除く）。

筆者が訪れたチェンライ近郊にある少数民族村のひとつ「LONG NECK KAREN HILLTRIBE VILLAGES」には5つの民族が集められていた（村により異なる）。村の名称からもわかるように、この少数民族村は“LONG NECK KAREN⁴⁾”、つまり前述の首長族といわれるカヤン族を見ることができる村であることを前面に出している。入村料300バーツを払い、村の中に入る。矢印にしたがって歩いていくと、最初にアカ族のエリアに入る。そこでは民族衣装を身に付けた人がお土産物を売っている。そして、観光客が集まると民族衣装を着た人々による踊りが行われる。その後、順路通りに歩いて行くと、ヤオ族、ラフ族、パロン族のエリアがあり、最後がカヤン族（首長族）のエリアとなる。いずれのエリアでも、民族衣装を身に付けた人々（主に女性）が座っており、観光客は彼女たちと写真を撮ったり、民芸品などを買ったりする。良く言えば「博物館」、悪く言えば「見世物小屋」のような所である。しかし、お土産物屋の裏には彼らの簡素な

住居がある。生活感あふれる住居の様子をみると、彼らが仕事としてここに通っているのではなく、実際に生活していることがわかる。幼い子どももいる。彼らが自分たちの文化に誇りを持ち、その文化を観光客に紹介することを通して収入を得ようと、積極的意思で村に住み、観光対象になっているのであれば、特に問題はないだろう。しかし、現実はそのようなわけではない。



写真2 少数民族の親子と写真を撮る観光客
(チェンライにて：2012年筆者撮影)

アカ族の村での出迎えの踊りを踊る者のなかには、まったくやる気がみられず、踊りが終わるとさっさと住居に帰っていく者もいた（他の者の多くは写真撮影の相手になったり、募金集めや伝統工芸品などを販売したりする）。この村でお土産物を販売したり、民族衣装を着て観光客と写真を撮ったりしている女性5人に話を聞いた。彼女たちは1～4年前にミャンマーから来たという。ほかの住民も多くがミャンマーから来たという。観光に関わる仕事がしたくてここに来たのか

と聞くと、そうではなく、ミャンマーから出る手続きをしてくれた人に連れて来られたのだという。彼らはあまりその経緯を話そうとしない。また、ガイドを通してほとんど会話ができない（タイ語が話せない）人もいる。最近ミャンマーからやってきたというカヤン族の女性は、ミャンマーでは貧しかったので、良い暮らしを求めてタイに来たという。彼女は不法入国しており（現在は手続きをしているというが…）、ブローカーの手によってここに連れて来られたようだ。

PDAチェンライ支部⁵⁾ 職員の話によれば、カヤン族はその特徴的な姿により観光客の人气が高く、観光ブローカーによりメーホンソーン付近の難民キャンプからチェンマイやチェンライ周辺の観光向けの少数民族村にその目玉として連れて来られているのだという。また、他の民族も含め、ミャンマーでは政治的問題や貧しさから、タイへの移住を希望する人は多く、それを観光ブローカーが“手助け”しているのだという（場合によっては半ばだまされて少数民族村に連れて来られる場合もあるらしい）。こういった事情を考えると、彼女たちが、少なくとも自らの民族文化を積極的に観光に活用するためにこの村での生活、仕事を選んだという状況ではないことがわかる。複数の民族を集めて生活させ、観光客に見せている様子はまさに「人間動物園」のような状態である。こういった村の現状、そして人々がここに住むようになった経緯には明らかに人権上の問題があると考えられる。

(3) 観光対象となる子どもたち

次に、観光地で観光対象となる子どもたちの例をタイとベトナムの事例から考えてみたい。チェンマイ郊外にあるモン族が住むドイプイ村は、市街から車で一時間程度のところにあり、

ソンテウを乗り継いで個人で行くことも可能である。また、チェンマイからの人気の観光地となっているドーイ・ステープ寺院やプーピン宮殿と同じ方面にあるということもあり、それらと組み合わせた日帰り観光が可能である。こういった条件が重なり、ドイブイ村にはタイ人も含め多くの観光客が訪れる。ドイブイ村の駐車場はお土産物屋で取り囲まれている。駐車場から村の中に続く歩行者用の道があり、両脇にはずらっとお土産物屋が並ぶ。さらに途中で入村料を払い、村の中へ入っていく。村の一番上あたりはちょっとしたガーデンになっており、観光客はそこで民族衣装を借りて写真を撮るとするのが定番になっている。その一角を除き、観光客が通る道のほとんどがお土産物屋で埋め尽くされている。観光化の進んだ小さなテーマパークのような村であるが、先の少数民族村と異なり、観光のために作られた村ではない。メインの通りから外れれば、彼らの住む家が立ち並ぶ。

この村の観光化の在り方について思うところは複数あるが、人権という視点から問題となるのは、その子どもたちである。この村の小さい子どもたち、特に観光客の集まる庭園近くにいる子どもたちは美しくかわいらしい民族衣装を身にまとっている。それは本来なら特別な時（新年など）にしか見ることができないきらびやかなものである。まさしく、観光客が期待する少数民族の姿といってもいいだろう。子どもたちは、彼らを写真に撮りたがる観光客からお金を稼ぐのである。ただし、本気で稼ぐつもりというよりは、もらえたらラッキー、という程度の印象を受ける。しかし、子どもにこういった民族衣装を着せ、お金をもらうことを教えるのは大人であろう。

もちろん、こういった光景はここだけではない。筆者が何度か訪れているベトナム北西部のサパでは、多くの黒モン族の少女たちが観光客に群がっている。観光客に民芸品等を売っているの



写真3 トレッキングに同行する黒モン族の子どもたち

(サパにて：2010年筆者撮影)

である。物を売りに来ているとはいえ、民族衣装を着た子どもたちがたくさん集まる様子はひとつの「観光対象」となる光景である。観光客がカメラを向けると「1ダラー」と手を出す子どももいる。また、民芸品を買ってあげて、一緒に写真を撮る観光客も多い。いずれにしても子どもたちは人気の「観光対象」なのである。それもあり、母親より自分の方がよく売れると言う子どももいる。何人かの子どもたちに話を聞くと、週2日ほど物売りに来るという。そして週2日以上

は畑で手伝いをしなければならず、そのためあまり学校に行かないという。教育を受けさせるより、畑の手伝いや現金収入につながる物売りをすることを優先させる家庭が多いのが現状である。もちろんこれは観光化のみの問題とはいえない。広範囲に家が点在する山間部において、通いや

すい場所に学校があるとも限らない。また、同じ地域に住んでいても子どもに物を売らせるよりも学校に行かせようとする民族もある（ヤオ族の男性がヤオ族とモン族の考え方の違いだと教えてくれた。）。しかし、子どもたちに観光対象となり収入を得る機会があることは、学校に通わない子どもを生み出す原因のひとつであり、観光客の行為がそれを助長しているといえよう。

観光地における児童労働の問題はこれまでも取り上げられている。例えば、ILOフィリピン・プロジェクトチームがまとめた『フィリピンの児童労働と観光産業』などがある。しかし、その中では10代半ばから観光関連の労働する子どもが問題視されている。一方、ここで取り上げた子どもたちは10歳未満の子どもも多く、5～6歳の子も珍しくない。とはいえ、過酷な労働という程でもないし、性産業などに従事させられているわけでもない。お土産物を売る、写真のモデルとなってお金をねだるといった行為は大きな問題として捉えられることは少ない（観光地における児童買春についてはこれまでも大きく問題視され、2005年には世界観光機関などにより「子ども買春防止のための旅行・観光業界行動倫理規範」が定められるに至った。）。しかし、1989年に国連総会で採択された「児童の権利に関する条約」に照らしてみても、子どもたちが観光対象とされる状況は観光地における人権問題の一つとして捉える必要があるだろう。

5. 「見られる」ことに関わる人権問題

(1) 日常生活を「見られる」こと

先にも述べたが、少数民族観光の大きな特徴の一つは、人々の日常生活の様子そのものが主要な観光対象となることである。もちろん、観光化した村で、観光客向けに民族舞踊を披露したり、商品売るために民族衣装を身につけたりする場合、それらは日常生活とはいえないだろう。しかし、仮に民族舞踊をステージや村の一角で見学するプログラムが組まれたツアーであったとしても、多くの場合、そのツアーには村の見学も含まれている。村を見学する観光客の視線はおのずと人々の日常生活の様子に向けられる。竹の皮や木で作られた簡素な高床式の住居、そのまわりで無邪気に遊ぶ子どもたちの様子、村を流れる小さな川で洗濯をする姿。特に日常的に民族衣装を着た人々の姿は、少数民族の伝統的生活文化を感じる象徴的なものである。しかし、観光客が訪れる村では一部の地域を除き、日常的に（観光客に見られるためではなく）民族衣装を着る人を見かけることが少なくなっている。だからこそ、民族衣装を着た人が道を歩いている姿や道端で談笑する姿があれば、カメラが向けられる。また、軒下に民族衣装が干されているだけでも、今でも民族衣装を日常的にも着る人がいる事実を示すものとして被写体になるのである。

ベトナム北西部、サパからラオカイを挟んだ東にあるバックハーという街のサンデーマーケットには、周辺に住む花モン族を中心に多くの少数民族が集合する。サパが観光化していることもあり、少しでも観光化されていない少数民族を求める観光客が多く訪れるようになった。花モン族の人々は、サパの黒モン族と違い、英語もほとんど通じない（2010年現在）。もちろん、花モン族の女性は観光客に見せるため、もしくは観光客に見られるつもりで華やかな民族衣装を着ているわけではない。しかし、遠慮なしに民族衣装を着た人々にカメラを向ける観光客が後を絶た



写真4 花モン族にカメラを向ける観光客

(バックハーにて：2010年筆者撮影)

ない。普通に買い物をしているときに急に正面からカメラを構えられたりするのである。道を歩いていきなり写真を撮られる側としては不愉快なものであろう。

ガイドが言うには少数民族の人々は写真に撮られることは自分の健康な精神（魂とでもいうべきか）を損なうものだと考え、嫌がるのだという。実際、写真を撮っていかたずねると、断られることも多い。断りなく写真を撮るといふことは、そういった思想・信条を無視した

行為である。また、思想・信条は別にしても、日常生活をのぞき見られ、カメラを向けられることは、決して気分の良いものではない。少なくとも、日本においては「何人も、その承諾なしに、みだりにその容ぼう・姿態を撮影されない自由を有する」とされる（最高裁昭和44年12月24日大法廷判決）。写真撮影の問題にからむ人格権や肖像権はまだ確立されているとまではいえないが、人権問題のひとつとして議論されている問題であることは間違いない。

しかし、観光客はもともと“観光”に来ているのであり、“観光対象”である彼らの生活にあたりまえのようにカメラを向けるのである。観光客は高いお金を出して訪れているため、「せっかく来たのだから」「少しくらいなら問題ないだろう」という感覚で日常では行わないような倫理性に欠けることを行う傾向がある（詳しくは、宮本 2008）。観光者個人にとってその地を訪れることは一度きりのことかもしれないが、観光地の住人は日々観光客にさらされているのである。写真を撮るかどうかにかかわらず、観光客相手の商売をしているわけではない一般の人々の日常生活を観光対象とする場合には、彼らの平穏な生活、感情を害することがないよう、適切な倫理的配慮が必要である。

(2) “貧しさ”を観光すること

観光客が、少数民族の観光向けではない姿、演じられていない日常にオーセンティシティを感じるとしても、演じられていない日常は必ずしもその民族の伝統的生活文化を感じさせるものとは限らない。単に“貧しさ”のみがそこにある場合がある。

ラオス北部、ルアンナムター県はアカ族やモン族、ヤオ族など多くの少数民族が居住している。中心都市ルアンナムターやさらに北部にあるムアンシンでは、旅行会社主催で少数民族の村を訪問するツアーが多く行なわれている。旅行会社の店頭には華やかな民族衣装を身にまとった女性、彼女たちと一緒に写った欧米人観光客の写真などを用いたポスターがたくさん貼られている。しかし、旅行会社の人に話を伺ったところ、実際こういった民族衣装を着た人が多く見られるのは

特別な日であり、通常は稀にしか見るできないという。実際にムアンシンで行われている典型的な少数民族訪問ツアーに参加してみた。筆者が参加したツアーでは約6種類の民族の村を訪問するものであった。ガイドはモン族の男性である。村に着いても民族衣装を身に付けた人々が出迎えたり、民族舞踊が披露されたりするわけでもない。また、訪問した村のうち、2つの村では民族衣装を着た人がお土産物を売りに来たが、それ以外の村では民族衣装を着ている人はほとんど見かけなかった。良く言えば、「観光向けではない姿、演じられていない日常」が観光対象になっているのである。そこで見ることができるものは何か。それは、隙間だらけの簡素な



写真5 裸んぼで遊ぶ子どもたち

(ラオスの村にて：2012年筆者撮影)

家々、舗装されていない道、川で洗濯をする人々、裸んぼで駆け回る子どもたち……。伝統的な暮らしぶりといえは聞こえは良いが、それは“貧しさ”に他ならない。

タイ国政府観光局による「山岳民族の村を訪ねて歩くトレッキングツアー」に関する記述においても、「電気も水道もない村での素朴な営みは貴重な体験です。」と、貧しさとも受け取れる状況を観光上の魅力として紹介されている。なぜ、“貧しさ”は観光の魅力になるのだ

ろうか。東（2007）は、「貧困」が民族観光におけるオーセンティシティを高める装置として働いていることを指摘している。観光客は、少数民族を観光するにあたっては、近代化した自分たちの生活とは異なる伝統的な人々の生活の様子、かつ、それが演じられたものではないことを期待する。そして、伝統的な生活という名の“貧しさ”に演じられていないリアルさを感じるのである。

池本（2010）は、「野蛮な暮らし振り」を眺めて楽しむというような観光には、観光客の優越感を満たすために少数民族を見下すという意識が隠されているという。もちろん、それは「隠されて」いるのであり、観光客自身に“貧しさ”を観光しているという認識があるか、優越感を実感しているかは別である。多くの観光客は、少数民族の人々の素朴な生活の様子、貧しくても素敵な笑顔を見せる子どもたちに、物であふれ、近代化の進んだ自分たちとは異なる幸せの形を見出し、それに癒され、“一時的に”称賛するのである。彼らを意識的に見下しているわけではない。しかし、それはやはり自己欺瞞に近いものである。観光者は、決して、帰国後に彼らが称賛した少数民族の生活スタイルを導入することはないだろう。

こういった観光者の奥に潜む一種の差別意識、さらには貧しい生活を送る人々をレジャーの一環である観光の対象とすることの倫理性についても、今一度考える必要がある。

(3) 奇異なものを見る観光客のまなざし

次に、観光者のまなざしに内在する問題について、再びメーホンソン等で行われているカレン族（首長族）を対象とした観光について考えていきたい。

観光客はどのようなまなざしで、首にコイルを巻き、首が長く見えるその姿を見ているのだろうか。貴重な伝統文化、自分たちとは異なる文化として尊重し、素晴らしいと感じて見ているのだろうか。少なくとも筆者の出会った観光客についてはそうではない。異様なもの、奇妙なものを見るまなざしで眺めるのである。そういった観光客のまなざしは、彼らの民族アイデンティティ、自らの文化に対する誇りを強めるものとは言いがたい。実際、筆者が訪れたナイソイ村で教師をしている20代の女性は、数年前にコイルを外したという（コイルを巻くこと強制されているわけではない）。彼女の話では、フランスやイギリスなどの外国人観光客が増えて、その姿を見るようになってから、コイルをつけない女性が増えたという。彼女自身、外国人観光客を見るようになって“コイルをつけないことの普通さ”を感じるとともに、コイルをつけた姿を“恥ずかしい”と感じる気持ちが生まれ、コイルを外したのだという。こういった現象は、これまで観光化が及ぼす文化への影響という観点から問題視されてきた。しかし、問題は文化への影響という結果だけではない。彼女がコイルをしていることを恥ずかしいと感じ、外したのは、コイルをした村人に対する観光客のまなざしに、前近代的で奇異な姿をした者に対する好奇の視線（異なる文化に対する尊重や称賛ではない。）を感じたからにほかならない。池本（2010）は、少数民族は「未開な野蛮人」として観光客に見せれば、民族の誇りを失うが、「貴重な優れた文化」として紹介されれば、それは誇りを取り戻すことになるという。そして、観光客が前者を拒否し、後者を求めることが、彼らの社会的地位の向上につながると指摘する。観光客のまなざしはそれほど影響力のあるものである。

6. 考察

以上、①「見せる」ことに関わる人権問題、②「見られる」ことに関わる人権問題、の二つの視点から、それぞれ事例を取り上げてきた。ここで紹介した事例は、タイ・ラオス・ベトナムのごく限られた地域の比較的知られた事例にすぎず、少数民族観光の現場で起きている人権問題を網羅したものではない。しかし、この限られた事例から考えただけでも、少数民族観光の現場でいかに人権に関わる問題が起きているかがわかる。さらに、それらの人権問題が生じる背景には、① 観光対象となるか否かを選択する自由の欠如、② 観光客の問題あるまなざし、があることがわかる。

「① 観光対象となるか否かを選択する自由の欠如」には二つの問題が含まれる。第一に、様々な面で弱い立場に置かれた少数民族の人々が、観光対象と“ならざるをえない”という状況にある場合の問題である。先にも述べたが、彼らは必ずしも観光対象となることを強制されているとはいえない側面もある。しかし、難民という立場、少数民族という立場、貧しさなど、社会的に弱い立場にある彼らは、行政当局や観光ブローカーとの力関係から実質、観光対象と“なら

ざるをえない” 場合があるのである。その特徴的な姿ゆえに観光対象という役割に固定され、受け入れを表明した第三国に行き観光対象としての生活から脱する機会すら奪われているカヤン族が置かれた状況は、観光が生み出した大きな人権問題なのである。それは前述のBBCの記事のなかでカヤン族の人が語る「四人のようだ」という言葉に象徴されている。また、自己決定能力の未熟な子どもたちが安易に観光対象として利用されていることも、ある意味“ならざるをえない” 問題である。そして、第二に個人の思想・信条および感情に関わる問題がある。村として観光を受け入れている場合であっても、村人のなかには、日常をのぞかれ、写真に撮られることに抵抗がある人（宗教的な理由、はずかしさも含む）も多いのである。彼らの人権を守るためには、観光客に見られることを好まない人々を観光客のまなざしから守る仕組み、そして観光客の観光倫理が求められる。

「② 観光客の問題あるまなざし」は、観光客の少数民族の人々に対する奇異なものを見るまなざしや、貧しさにオーセンティシティを見出すまなざしなどである。一方で、これらの“問題あるまなざし” を受けたとしても、そういった観光客により観光地が成り立ち、利益を得て生活が豊かになるなら問題ない、と考える人もいるかもしれない。しかし、“問題あるまなざし” によって成り立つ観光は、持続可能性という観点からみても問題がある。例えば、生活の豊かさを求めて貧しさを売りにすることは矛盾を内包している。観光地として成功し、豊かさを手に入れば、少数民族に未開性を求め、貧しさにオーセンティシティを感じる観光客はさらに「本物」を求めて別の地域を目指すことになるだろう。また、奇異なものを見るまなざしの対象となる観光についても同じようなことがいえる。観光対象となることでお金がもらえても、恥ずかしく、自尊心を傷つけられることになる。観光客が来るようになってからコイルをつけた姿を“恥ずかしい” と感じて首に巻いたコイルを外すようになったカヤン族の女性のように観光対象となる文化そのものを捨て去ることにつながれば、観光対象としての魅力は失われることになる。このように“問題あるまなざし” によって成り立つ観光は、観光対象となる文化を持つ自分たちを誇りに思えるような観光ではなく、伝統文化の保護につながるものでもない。そして、持続可能性という観点から考えても、彼らのためになる観光とはなり得ないのである。

以上の考察により、少数民族観光に関わる人権問題を防ぐためには、少なくとも観光対象とならない自由が確保され（観光対象とならなくても生活していけることが前提である）、かつ観光客の問題あるまなざしを是正していくことが不可欠であることがわかる。特に、観光客のまなざしは観光対象となる人々に直接影響を与えるだけではなく、観光開発のあり方にも影響を与えるものである。観光客が観光対象に何を期待するのか、何にオーセンティシティを感じるのか、そして観光地でどのような体験を求め、どのような態度で観光するのか。それらすべてが当該観光を倫理的に良くも悪くもするのである。したがって、観光が、観光対象となる少数民族の生活や文化、社会的地位の向上に貢献するものであるためには、観光客のまなざしや観光態度を規定する観光倫理をいかに確立していくかが大きな課題となるのである。

本研究はこういった問題に対する具体的な解決策を示すまでには至っていない。また、本稿で

紹介した事例以外にも他の地域では異なった種類の観光に関わる人権問題も起きているであろう。今後はさらに多くの事例を調べると共に、世界各地で始まっている新しい取り組みを踏まえ、実践的な研究を行っていく必要がある。

(注)

- 1) 石井 (2010) によれば、観光対象となっているタイの少数民族の人々には、タイ国籍を持たない者（無国籍の物を含む）が多く、彼らの法的な立場の脆弱性が利用されている側面があるという。
- 2) もちろん、少数民族観光でも民族舞踊を披露したり、ガイド役を務めたり、観光客にサービスを提供するホストとして観光客と接する人もいる。その役割については同じといえる。しかし、本来なら観光客に見せるわけでもなく日常生活を送っている一般の人々の姿も観光対象になる。そういった人々は「ホスト」側とひとくくりにはできないだろう。
- 3) ゴールデントライアングルとは、タイ、ラオス、ミャンマーにまたがる地域で、以前は世界有数のアヘンの産地として知られた場所である。そこではかつて多くの少数民族が換金作物としてケシを栽培していたのである。
- 4) 彼らはカレンの支族とみなされる場合もあり、こういった観光村ではカランではなく「首長カレン (Long Neck Karen)」と表記している。
- 5) PDA (Population & Development Association) は人口問題や地域開発などに取り組むタイを代表する NGO である。そのチェンライ支部では、山岳民族博物館を運営するとともに、少数民族支援の活動などを行っている。

引用・参考文献

- 東美晴, 2007, 「中国青海省における貧困と観光」『流通経済大学社会学部論叢』17(2), pp.77-87.
- BBC NEWS (2008), Burmese women in Thai 'human zoo' (30 January)
(<http://news.bbc.co.uk/2/hi/asia-pacific/7215182.stm>) 2012年9月20日参照.
- Cohen, E., (2001), *Thai Tourism: Hill Tribes, Islands and Open-ended Prostitution*, White Lotus.
- 外務省, 「児童の権利に関する条約」(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/zenbun.html>) 2012年9月20日参照.
- Greenwood, D.J., [1977]1989, Culture by the pound: an anthropological perspective on tourism as cultural commoditization, Smith, V. L. ed., *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, 2nd ed.: The University of Pennsylvania Press. (=1991, 三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房, pp.235-256)
- 池本幸生, 2009, 「6 ベトナムの観光と少数民族の暮らし」藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光』ナカニシヤ出版.
- 池本幸生, 2010, 「第15章 少数民族の社会的地位と観光の役割—ケイパビリティ・アプローチの観点から」藤巻正己・江口信清編著『貧困の超克とツーリズム』明石書店, pp.467-494.
- フィリピン・プロジェクトチーム編、日本労働組合連合会訳, 2001, 『フィリピンの児童労働と観光産業』明石書店.
- 石井香世子, 2004, 「少数民族観光とイメージ表象：北タイ「山地民」をめぐる観光を事例に」『NUCB journal of economics and information science』49(1), pp.215-240.
- 石井香世子, 2005, 「エスニック・ツーリズムにおける観光産業と国家：北タイ山地民とトレッキング・ツアーの事例から」『NUCB journal of economics and information science』50(1), pp.13-20.

- 石井香世子, 2010, 「第十章 国際観光システムを底辺で支えるはざまの人々—タイ山岳少数民族と観光産業」江口信清・藤巻正己編著『貧困の超克とツーリズム』明石書房, pp.291-323.
- 城前奈美, 2010, 「タイ北部の少数民族村の観光化と経済開発—チェンマイ県を事例として」『観光学論集』5, 長崎国際大学国際観光学会, pp.1-7.
- 片山隆裕, 2006, 「タイにおける山岳少数民族ツーリズム—歴史的経緯, 影響, そして持続可能な観光開発の試み」『西南学院大学国際文化論集』21(1), pp.113-146.
- 宮本佳範, 2008, 「観光振興における観光倫理教育の必要性—東南アジア地域の観光を念頭に—」『第14回観光に関する研究論文入選論文集』, 財団法人 アジア太平洋観光交流センター, pp.19-35.
(<http://www.aptec.or.jp/image/activities3/43-1.pdf>)
- 中田友子, 2003, 「儀礼の観光資源化と少数民族のアイデンティティ形成についての一考察—南ラオス, モン・クメール系集団の事例から」『南方文化』30, pp.109-124.
- 須藤廣, 2007, 「現代の観光における「まなざし」の非対称性—タイの山岳民族「首長族(カヤン族)」の観光化を巡って」『都市政策研究所紀要』(1), pp.31-41.
- 須永和博, 2009, 「マイナー・サブシステムとしての観光: タイ北部の山地カレン社会におけるコミュニティ・ベース・ツーリズム」『立教大学観光学部紀要』11, pp.53-67.
- 田中佳子・佐藤哲夫, 2008, 「タイ国メーホンソーン県におけるカヤン観光集落の展開」『地域学研究』(21), pp.9-31.
- タイ国政府観光庁「チェンマイ」(<http://www.thailandtravel.or.jp/area/chiangmai.html>) 2012年9月20日参照
- Theerapapissit, P., 2009, Pro-poor Ethnic Tourism in the Mekong: A Study of Three Approaches in Northern Thailand, *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, 14(2), pp.201-221.
- 山下晋司, 1999, 『バリー観光人類学のレッスン』東京大学出版会.

受理日 平成24年9月24日